

Hara Museum of Contemporary Art

森村泰昌：エゴオブスクラ東京2020—さまよえるニッポンの私

2020年1月25 日 [土] - 2020年4月12日 [日]



1_映像作品「エゴオブスクラ」2020より

【展覧会概要】

原美術館におきまして「森村泰昌：エゴオブスクラ東京 2020—さまよえるニッポンの私」展を開催いたします。

内面奥深く、私の中心らしきところをいくら探しても、「真理」に出会うことなどはあり得ず、ただただ、そこには「空虚」が広がるだけなのだというのを、私は子供のころからよく知っていました。むしろ、真理や価値や思想というものは、私の身体の外側にあって、それはまるで「衣服」のように、いくらでも自由に着替えることができるのだ。そのように捉えたほうが、私にはずっとよく理解できたのでした。（映像作品「エゴオブスクラ」より）

名画や映画の登場人物あるいは歴史上の人物に自らが扮するセルフポートレート作品で知られる森村泰昌。巧みなメイクや衣装で、時代や人種、性別を超えて様々な人物に自らが成り代わり、制作を通して原作やその背景に独自の解釈を加えてきました。1985年に「肖像（ゴッホ）」で鮮烈のデビューを果たし、以降、一貫して「私」とは何かという問いに取り組む森村は、さらに、自らが脚本を手がけ自演する映像作品や、ライブパフォーマンスへと表現の領域を広げています。

森村は、2018年にニューヨークのジャパソサエティーで展覧会「Yasumasa Morimura: Ego Obscura」を開催しました。その凱旋展と位置づけられる、東京 2020 展用に再編集された映像作品「エゴオブスクラ」と、この映像を用いて会期中開催される作家自身によるレクチャーパフォーマンスを通じて、作家は日本近現代史、文化史に言及します。映像作品「エゴオブスクラ」には、日本人の記憶に深く刻まれている昭和天皇とダグラス マッカーサー、あるいはマリリン モンローや三島由紀夫らに扮した森村が登場します。戦前の教えが否定され日本人に広がった「空虚」、そこは西洋の価値観で埋められていきました。1951年、大阪に生まれた森村は、その時代の日本で教育を受けた個人的経験から、やがて「真理や価値や思想というものは（中略）いくらでも自由に着替えることができるのだ。」（映像作品「エゴオブスクラ」より）という発想を導きます。30年に渡り西洋美術史に侵入しながら、森村は何を考えて人種や性別を超えてきたのでしょうか。自らの言葉で自作が生まれた背景、そして、そこに込められた思いを語る「エゴオブスクラ」は、ニューヨークでも大きな反響を得ました。森村は「エゴオブスクラ（Ego Obscura）」という耳慣れない言葉に「闇に包まれた曖昧な自我」という意味を込め、愛情のみでは片付けられない母国への複雑な感情をにじませながら、セルフポートレートという形で、「さまよえるニッポンの私」とは何かという命題に挑みます。

戦後日本の復興を印象付けた先の東京オリンピックから 55 年を経た 2020 年、再び東京でオリンピックが開かれる年に、森村泰昌は「私」とは何かを我々にも問いかけます。

Hara Museum of Contemporary Art

【展覧会の見どころ】

1、レクチャーパフォーマンス「エゴオブスクラ東京 2020 バージョン」

会期中作家自身によるレクチャーパフォーマンス「エゴオブスクラ東京 2020 バージョン」をご覧くださいませ。

日程(予定)：いずれも 16:00~17:00

1月 25日(土)、1月 26日(日)、2月 22日(土)、2月 23日(日)、3月 20日(金祝)、3月 21日(土)、4月 12日(日)

*無料(要入館料)、事前申し込み制 *詳細はウェブサイトに掲載します。

2、森村泰昌と原美術館

原美術館では、17世紀オランダの偉大な画家をテーマに、その人生の明暗から「自我」を深く探った「森村泰昌 レンブラントの部屋」展(1994年)、20世紀メキシコ現代絵画を代表する画家の一人フリーダ カーロの人生、その愛と死を独自の祝祭的イメージで描いた「私の中のフリーダ 森村泰昌のセルフポートレート」展(2001年)を開催しました。また、館内のトイレを作品化したユニークな常設インスタレーション「輪舞(ロンド)」が1994年に完成。時折装いを新たにしながら、現在も美術館の顔として展示されています。

3、マネ「オランピア」から生まれた初期代表作「肖像(双子)」と新作「モデルヌ・オランピア 2018」が競演

初期の代表作である「肖像(双子)」(1988年)で森村は、近代絵画史に転換をもたらしたエドゥアール マネ「オランピア」(1865年)を題材に選びました。マネが描いた白人の娼婦と黒人の召使を、黄色人種でかつ男性である森村が演じます。裸で横たわりつつ、視線にさらされる側から強い眼差しを返し、さらに主従の関係にも言及した「肖像(双子)」から30年後、森村は「モデルヌ・オランピア 2018」を発表しました。若い娼婦は蝶々夫人を想わせる芸者の姿に、黒人召使はピンカートン風の西洋男性の姿に変わりました。本展では、同じくマネ晩年の秀作を原作とする「フォーレベルジュールのバー」の最新作も登場します。この3点の登場人物が複雑にからまる展示は必見です。

【森村泰昌(もりむら やすまさ)】

1951年 大阪市生まれ。大阪市在住。京都市立芸術大学美術学部卒業、専攻科修了。

1985年 ゴッホの自画像に扮するセルフポートレート写真を制作。以降、今日に至るまで、一貫して「自画像的作品」をテーマに作品を作り続ける。

1988年 ヴェネチアビエンナーレ/アペルト88に選出され、以降国内外で展覧会を開催する。主に西洋の絵画や、映画、マスメディアのイメージから主題をとることが多く、これまで、ゴッホ、ベラスケス、ゴヤ、フェルメール、フリーダ カーロといった西洋絵画から主題をとったほか、映画などのポップカルチャー、レクイエムシリーズにみられる報道写真まで、さまざまな主題を通して、アイデンティティーや、ジェンダーの問題を投げかけるだけでなく、メディアとしての絵画や写真とは何かといった問題への考察を含み、アーティスト自身と、観客に対して様々な視差を提示する。

主な個展に「森村泰昌 美に至る病-女優になった私」(横浜美術館 1996年)、「森村泰昌 [空装美術館] 絵画になった私」(東京都現代美術館ほか 1998年)、「私の中のフリーダ 森村泰昌のセルフポートレート」(原美術館 2001年)、「森村泰昌：なにもかへのレクイエム-戦場の頂上の芸術」(東京都写真美術館ほか 2010年)、「Yasumasa Morimura: Theater of the Self」(アンディ・ウォーホール美術館/ピッツバーグ 2013年)、「森村泰昌：自画像の美術史-「私」と「わたし」が出会うとき」(国立国際美術館 2016年)、「Yasumasa Morimura. The history of the self-portrait」(国立プーシキン美術館/モスクワ 2017年)、「Yasumasa Morimura: Ego Obscura」(ジャパソサエティー/ニューヨーク 2018年)など。

2014年 ヨコハマトリエンナーレ2014のアーティストティックディレクターを務める。

2018年 レクチャーパフォーマンス「森村泰昌：日本、チャチャチャ！」を、ポンピドゥ・メス(フランス メス)、港区男女共同参画センター・リーブラホール(東京)、ジャパン・ソサエティー(ニューヨーク)にて上演。

2018年 大阪北加賀屋に「モリムラ@ミュージアム」が開館。

2019年 新著「自画像のゆくえ」を刊行。

2007年度 芸術選奨文部科学大臣賞、2011年 第52回毎日芸術賞、日本写真協会賞。同年秋、紫綬褒章を受章。

近著に「森村泰昌/全女優」「まねぶ美術史」「対談 なにもかへのレクイエム/20世紀を思考する」「美術、応答せよ」など。

Hara Museum of Contemporary Art

【広報用図版】



2



3



4



5

- 1_映像作品「エゴオブスクラ」より 2020 (参考写真) 撮影：福永一夫 ©Yasumasa Morimura
- 2_映像作品「エゴオブスクラ」より 2020 (参考写真) 撮影：蓮沼昌宏 ©Yasumasa Morimura
- 3_「モデルヌス・オランピア 2018」2018 ©Yasumasa Morimura
- 4_「ポートレート(女優)／駒場のマリリン」1995-2008 ©Yasumasa Morimura
- 5_「なにものかへのレクイエム (MISHIMA 1970. 11. 25-2006. 4. 6)」2006 ©Yasumasa Morimura

【開催要項】

展覧会名 「森村泰昌：エゴオブスクラ東京2020-さまよえるニッポンの私」

(欧文表記 Yasumasa Morimura: Ego Obscura, Tokyo 2020)

主催 原美術館

協賛 regist ART

協力 一色事務所 千島土地株式会社 ジャパン・ソサエティ

会期 2020年1月25日[土] - 2020年4月12日[日]

住所 東京都品川区北品川4-7-25 〒140-0001 Tel 03-3445-0651 E-mail info@haramuseum.or.jp

休館日 月曜日 (祝日の場合は翌平日)

開館時間 11:00am-5:00pm (水曜日は8:00pm まで/入館は閉館時刻の30分前まで)

入館料 一般1,100円、大高生700円、小中生500円、70歳以上550円/原美術館メンバーは無料、

学期中の土曜日は小中高生の入館無料/20名以上の団体は1人100円引

交通案内 JR「品川駅」高輪口より徒歩15分/タクシー5分/都営バス「反96」系統「御殿山」停留所下車、徒歩3分/
京急線「北品川駅」より徒歩8分

ウェブサイト <https://www.haramuseum.or.jp>

* 作品点数 約20点

* 毎週日曜日には当館学芸員によるギャラリーガイドを行います。(2:30pmより30分程度)

* 映像作品の上映は入替制を予定しております。詳細は決まり次第、当館ウェブサイトにてお知らせいたします。

regist
ART

HARA
MUSEUM

森村泰昌：エゴオブスクラ東京2020-さまよえるニッポンの私

担当学芸員：内田

取材・図版提供など広報に関するお問い合わせ 原美術館広報：野田・市川

E-mail: hmpr@haramuseum.or.jp Tel: 03-3280-0679 Fax: 03-5791-7630

Twitter: @haramuseum Instagram: @hara_museum